

【会員だより 新卒紹介】

## 社会に出て

母校を巣立った短大 18 回生が社会の荒波に立ち向かって活躍しています。  
その同窓生が、今の心境を素直な気持ちで書いてくれました。  
お近くの先輩方には卒業生を今後とも宜しくご指導ご鞭撻をお願い致します。

## 診療放射線技師になれて

島根県立中央病院 勤務 石倉諒一(短 18 回生)



私は島根県立中央病院で勤務しています。

当院は、「医療の主人公は患者さんである」を基本理念に、県民の皆様のニーズに応える医療の提供を目指しています。救命救急医療、高度特殊医療の充実強化と共に、患者さんの利便性や快適性を確保した療養環境の整備、敷地内に庭園を配置するなどの景観と環境への配慮、全国でも初めての電子カルテシステムを核とした戦略的な病院統合情報システムの構築による高度で効率的な医療の提供など、21 世紀の県の基幹的病院に相応しい機能が整備されています。

基幹的病院には本格的な少子高齢化社会を迎えるなかで地域の医療機関と連携しながらより質の高い医療サービスを提供することが求められています。

当院は県民の皆様がより一層満足していただける医療サービスを提供するために、職員一丸となって努力しています。医療方針は、人と人、心と心のふれ合いのある、患者さんサイド、県民サイドなど地域から信頼される医療の実践であります。加えて、当院の使命は第 1 に高度・先進医療を提供すること、第 2 に県民の最後の砦としての救急医療、周産期医療などを充実させること、第 3 に僻地、離島などの地域医療を支援することです。私は、この方針と使命を果たすために、日々、診療放射線技師として努力しています。

学生時代は、国家試験に合格するのが第一目標といいながら、とても国家試験に出題されるはずもない難易度の高い問題を作成される、先生方に好意以外の感情も持っていました。しかし今では、その時の勉強が自分を支えてくれていることに気づき、本当に感謝しています。

最後ですが校友会では、山陰支部の所属になります。日本三大船神事であるホーラエンヤで盛り上がる中で行われた、山陰支部総会に出席させていただきました。その際、数名の若者と泥酔状態になり、出席された諸先輩方、唯一の女学生(小玉さん)に、ご迷惑をかけたことを猛省します。すみませんでした。今後とも校友会山陰支部の皆様よろしくお願ひします。

## 勤め始めて思うこと



南和歌山医療センター 勤務 上村 歩(短 18 回生)

私は今、病床数約 320 床、技師数 10 名の南和歌山医療センターに勤めています。核医学や放射線治療装置もあり、様々な分野が学べる施設です。

国立病院機構としていくつかの病院と連携しており、勉強会や交流会が多く行われているのも特徴です。これまでに何度か参加してみましたが、他病院の先輩技師と色々な話をするというのは、自分の勤めている病院だけにとられないという点でとても良い機会だと思っています。

最初は学校で学んだ座学と現場の違いに戸惑いも多く、不安感が先行していました。どのモダリティにおいても教科書に載っているのはあくまでも基準で、実際は患者様それぞれに合わせて変えていかなければなりません。教科書どおりとはいかず、初めは先輩の指示に従うことで精一杯、覚えていたことも頭の外でした。個々

の患者様に合わせていく、そこが技師の腕の見せ所、ということ現場に出て初めて実感しました。今では先輩方の丁寧な御指導のおかげもあり、少しずつ自信が持てるようになってきています。また半年ほど経って、初めは忘れかけていた「現場での応用力を養うためにも学校で学んできたことが一番の土台となる」という考えを改めて持てるようになったことも、自分の中では大きな一歩ではないかと思っています。

私の勤めている病院の放射線科の操作室には「待たせず、やさしく、正確に」という言葉が掲げられています。たった三言ではありますが、実際に勤め始めてこの言葉はとても重要で難しいものだと感じています。時間との勝負でもある現場で、どれだけ優しく丁寧に患者様と接し、正確な検査を遂行していくか。どれも欠けてはならないこのキーワードは、技師としてそして人として、これから過ぎていく中で常に大きな課題であると思っています。

検査終了後に、患者様が「ありがとう」と言って下さることは何よりも嬉しいです。まだ出来ることが少ないからこそ今出来ることを精一杯行い、関わる全ての人々が気持ち良く思っただけのように、笑顔で日々努めていきたいと思ひます。

## 臨床現場に立ってみて



東和会病院 勤務 阪元翔太(短18回生)

私は東和会病院に入職し、半年が過ぎました。当院はベッド数約250床、24時間対応の救急医療を実践しており、地域と密着した病院です。診療放射線技師は13名、業務としては一般撮影、CT、MRIです。また、併設した介護福祉施設で一般撮影を行っています。

一般撮影では学生時代、必死に国家試験に必要な科目を勉強しましたが、いざ臨床現場では患者様の体型や状態によって、撮影技術学で学んだ基本的なポジショニングでは対応できない場合があります。いろんなケースに対応できるように自分で考え、先輩方のアドバイスをいただいて撮影できたことで少しずつ自信が付いてき、充実感も得ています。

私は就職してから常に心がけていること、それは患者様への接遇面です。特に一般撮影は患者様と密に接する場なので、患者様の不安を少しでも取り除いてあげられるよう笑顔で、体を触れる際にも必ず声をかけてから行きます。

また、安心して検査を受けられるように患者様にあわせて理解しやすい言葉で話すようにも留意しています。

救急医療では医師・看護師などのスタッフとのコミュニケーション・チームプレイがとても大切です。救急の撮影をする際に、その場の状況を判断して、自分が今何をすべきか、様々なスタッフと迅速な連携を取って動かなければなりません。

自分の撮った画像で読影・診断され、患者様の治療方針が決まる、患者様の治療の第一歩に関与する重要な仕事しているのだと改めて実感しました。診療放射線技師としての責任感をしっかり持ち、仕事に励みたいと思ひます。そして、日々進歩していく医療についていけるように、臨床現場の経験、知識を取り入れ、院外の勉強会にも積極的に参加して、さらなる向上心をもって自分のスキルアップをしていきたいです。

## 診療放射線技師として働き始めて感じたこと



宮田病院 勤務 松本 優里(短18回生)

私が現在勤務している病院は、ベッド数264床、一般撮影・CT・MRI・マンモグラフィを主な業務とし、診療放射線技師7名の地域の中規模病院です。

入職して半年が経ちましたが、仕事ではまだまだ覚えることも多く毎日が勉強です。そんななか、仕事をするにあたって常に心掛けていることは、忙しい業務の中でも患者さんと挨拶をしたり、症状を聞いたりしてコミュニケーションをとることです。コミュニケーションをとることで患者さんの持っている不安が減り、撮影に対しても協力的で、しっかりとしたポジショニングを行うことができ、短時間で入るため技師・患者お互いにとって効率の良い撮影が行えるからです。

そのなかでも、マンモグラフィは狭い撮影空間の中で患者さんと一対一で直

接乳房に触れて撮影するので緊張をほぐし羞恥心を少しでも和らげるため、ひとつひとつの行動に対して説明し、会話をしながら行っていきます。マンモグラフィの撮影を始めたばかりの頃はポジショニングに精一杯であり会話をする余裕もなく、こちらの緊張も患者さんに伝わってしまい難航することもありましたが、経験を重ねるにつれて会話できるようになり同じことをしていても、淡々と撮影するよりは声をかけ、答えていただきながら撮影することで患者さんの緊張も和らぎ、リラックスしてスムーズな撮影が行えているのを感じるようになりました。

病院には様々な状況の患者さんが検査を受けに来ますが、その患者さん一人一人に対して適切な接し方や撮影の仕方を常に考えながら取り組むようにしています。働き始めて学んでいることは学校では習わないことばかりですが、学校で身に付けた知識があつてこそできる仕事だと思えます。

今は視野も狭く撮影技術も臨床の知識もまだまだですが、毎日の経験から様々なことを学び、診療放射線技師としてスキルアップしていきたいと思えます。

## 現場に立って感じたこと



なぎ辻病院 勤務 山口 智紀 (短 18 回生)

京都医療技術短期大学を卒業後、国家試験の合格発表まで補助として働き、合格した現在は、診療放射線技師が常勤4名、非常勤1名が在籍しているなぎ辻病院にて一般撮影、CT、MRI を輪番で担当しています。入職後は検査の流れを覚えるのに手一杯で各モダリティの操作やポジショニングを覚えながら、検査が終わればフィルムを診察室へ持っていくことを繰り返し、雑務もあつて勤務が終わればぐったり疲れてしまい、帰りの電車で寝過ごしてしまう事もありました。

学生時代は総合試験と国家試験に合格するために色々と勉強し、アルバイトで人と接してきましたが、いざ技師になって実践してみると思うような検査や接遇になりません。そのためにも予習だけでなく先輩方からアドバイスをいただいたりしています。接遇においても、患者さんの検査に対する不安を取り除くために積極的かつ落ち着いて話しかけるように取り組む事を心がけております。

働き出してもっとも感心したのはMRI検査での接遇です。当院ではオープン型MRIを使用しており、オープン型MRIの利点の一つに閉所恐怖症の方に少ない負担で検査を受けていただけることが挙げられます。私はこれを勉強して覚えた程度でいたのですが、実際は閉所恐怖症の方が多く驚きました。検査前にMRI装置を見ていただき、患者さんが「これなら大丈夫」と安心されたり、インターネットであらかじめ調べてくる患者さんもおられました。

これから診療放射線技師として働くにあたって、日々進歩する医療に置き去りにされないよう努めてなければなりません。このためにも勉強会に参加し、各資格試験に挑戦するなどスキルアップしていきたいと思えます。

最後になりましたが、当院は10月から電子カルテ化、PACS運用が始まり、これに伴ってCRが新しくなるなど仕事環境と雑務内容が大きく変わりました。一日も早く新しい機器に慣れ、今の作業をマスターしたいと思えます。

以上

\* 通巻 194 号 2010 年 1 月 10 日発行(H21 - No.4)より